



「あの惨禍を二度と繰り返さない」

戦争を知らない若い世代が戦争体験者の思いを受け継ぎ、悲惨な体験と教訓を継承しようとする姿をシリーズで紹介する。初回は、戦病死した曾祖父の無念さに思いを巡らせ、反戦の作文を書いた中学生とその家族を訪ねた。

曾祖父の無念さ思い、作文に綴る

龍谷大付属平安中学3年 **船橋 維さん**

戦争の影、あふれる苦しみや悲しみ

生まれた子を2度と抱くことなく

京都市にある宗門校の龍谷大学付属平安中学校に通う船橋維さん（15、同市・真覚寺門徒）。

昨年9月18日に宗門が営んだ千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要（東京・千鳥ヶ淵戦没者墓苑）で、「反戦に対する思い」と題した作文を読んだ。

祖父から聞いた、曾祖父のことを書いたものだ。

「1941年8月23日、中国の済南陸軍病院で1人の兵士が命を落としました。享年28歳。本国に残した生まれたばかりのわが子を2度と抱くことなく、その兵士は世を去りました。孤独で、無念の死であったでしょう。生きてもう一度家族のもとに帰りたいかったです。でもその思いは果たせなかった」

この「わが子」が、維さんの祖父・弘さん（75）。現在、京都市内で暮らす。作文は続く。

「時は過ぎ、残された彼の息子は立派に成長し、2人の息子を育てる親となり

ました。そして今では4人の孫に囲まれるおじいちゃんとなりました。実はその孫の1人が私なのです」

人の心の傷は

誰も責任取れない

維さんは両親、弟と一緒に、弘さんの近所で暮らしている。

弘さんは自らの体験をほとんど話してこなかった。

弘さんの次男で、維さんの父親である渉さん（44）は

「父は祖父のことを語りたがらず、『覚えてない』とはぐらかしていた。でも、維さんには…」と話す。

維さんは語る。

「おじいちゃんは、父親の顔は写真でしか知らない。その温もりを知らないまま、自分がどんな思いで生きてきたかを話してくれました。そして最後は必ず、『戦争だけはしてはいけない。戦争は形式的な責任はとれるかもしれないが、人の心の傷はだれも責任を取れない』と結んだ。その言葉から、戦争の影にいつも苦しみや悲しみがあふれていることを知った。曾祖父もその中にいた1人だったと思うと、あの作文を書かずにはいられなかった」

戦死の知らせと家族宛の手紙

弘さんが話した「父」とは。

「父・廣吉は大正3（1914）年、故銅商の家庭の長男として生まれた。廣吉は会社名でもあり、跡取りとして大切に育てられたんですよ。それなのに、戦争というものが、家族みんなの将来を大きく狂わせてしまった」

廣吉さんは出征前に八重さんと結婚、昭和15（1940）年7月に弘さんが誕生した。しかし、その後すぐに中国の戦地に赴いた。そして、昭和16年8月23日、



写真上＝手帳や手紙など廣吉さんの遺品を手取る弘さん（左から2人目）と維さんの家族
同右＝中国で戦病死した廣吉さんの写真と手帳、手紙

腸チフスで戦病死した。

「戦死の知らせと一緒に、遺骨と軍刀、帽子、かばんなどが戻ってきたそうだが、私の手元には家族宛てのはがきと手紙、1冊の手帳とかばんだけ」と語って、弘さんがその手紙を出してきてくれた。

その手紙には、わが子の誕生を喜び、健康を気遣う様子が記されていた。「中学生の時に母から譲り受けて以来、久しぶりに手紙を読み返した。これが父の書いた文字や」。淡々と話す

弘さん。

「戦死の知らせと一緒に、遺骨と軍刀、帽子、かばんなどが戻ってきたそうだが、私の手元には家族宛てのはがきと手紙、1冊の手帳とかばんだけ」と語って、弘さんがその手紙を出してきてくれた。

時代ゆえに泣くに泣けず

泣くに泣けず

戦争の現実見詰め、家族の絆深める

「子どもが思い出を語る。『子どもの頃、不思議に思っていたことがあった。わが家には毎月3回、お寺さんが月命日のお参りに来られていた。曾祖父と曾祖母と、もう1人』。この「もう1人」が廣吉さん。渉さんは小学生の頃、『ぼくが一緒に住んでいるおじいさんは、ほんまのおじいさんどちゃうんか』と尋ねて何回も親戚の人に聞き返した」ことを覚えていた。

渉さんは2児の親となつてから、見たことのない廣吉さんのことを深く考えるようになった。

「戦地で病に倒れた祖父は、どれだけ家族のもとに帰りたいか、子どもに

会いたかったかと思う。そして、戦死したと聞かされた家族の気持ちを思うといたたまれない。時代が時代ゆえに、泣くに泣けず、感情も複雑だったと思う」と言う。

直筆の文字 伝わる思い

「父が見せてくれたのは、実は初めてなんです」と言いながら、渉さんは廣吉さん直筆の手紙や病床日誌を手にとった。手帳を眺めて

「生きて帰りたい」と書いていないが、亡くなる間際まで書き綴った文字から、『生きたい』『家族の元へ帰りたい』という強い思いが伝わってくる」。

その側で、弘さんは孫の維さんを見ながら、「孫の作文がきっかけで、素直に父を偲ぶようになったんです。今までこんなに父のことを考えたりしなかった

から、何かうれしい。孫に刺されたんかな」と笑顔で浮かべた。

維さんの作文をきっかけに、戦争の悲しみを正面から見詰め、「家族」の絆を深めた船橋さん一家。作文にはこう結ばれている。

「戦争は人の思いを踏み

にじり、人の尊い命を奪い去ります。そして、残された人の心にまで、深い傷を残していきます。そんなことは本来あってはならないことです。再び戦争の惨禍で苦しむ人がないように、私たちはそれを後世に伝える重大な責務を負っています。私たち一人一人が戦争の残酷さを直視し、反戦の遺志を貫かねばならないのです。2度と私の祖父や曾祖父のような思いをする人が出てこないよう、私は今後も反戦の考えは変えるつもりはありません」